

— 原 著 —

保育専攻学生における動物と触れ合う経験が 保育実践に与える影響

川 村 高 弘 永 井 久 美 子

The Influence of Experiences in Coming in Contact with Animals for
University Students Majoring in Early Childhood Education
in Childcare Practice

Takahiro KAWAMURA Kumiko NAGAI

要 旨

幼児が身近な動植物と触れ合いやすい環境を積極的に整えて行くためには、保育者自身が積極的に身近な動植物にかかわろうとする姿勢が必要である。しかし、保育者を目指す学生の中には、身近な動植物の中でも特に動物にかかわることに抵抗を感じる者も多い。

そこで、昆虫や小動物に着目し、保育者を目指す学生の幼少期の環境や経験、昆虫や小動物（鳥、魚含む）に対する意識が、動物とのかかわりの中で、子どもに身につけてほしい力や、将来、子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかかわっていくことができるかどうかといった保育実践への自信とどのような関係にあるのかについて検討を行った。育てたい力の「探究心」「公共心」「思いやりの気持ち」は、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「動物への主体的なかかわり」から影響を受けていることが明らかになった。また、保育実践への自信である「昆虫・小動物に関する保育実践への自信」は、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「昆虫肯定感」から影響を受けていることが示された。

キーワード：保育者、保育専攻学生、環境、昆虫、動物、

I. 問題と目的

身近な動植物と触れ合う経験は幼児の成長・発達にとって大変重要である。幼稚園教育要領(2008)では「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」、また、保育所保育指針(2008)では「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く」などとうたわれている。さらに、幼稚園教育要領(2008)では、内容の取扱いにおいて「身近な事象や動植

物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にすること、公共心、探究心などが養われるようにすること」と示されている。幼稚園教育要領や保育所保育指針からは、身近な動植物と触れ合う経験を通し、子どもに身につけてほしい力として、「動物の生命を大切にすること」「探究心」「公共心」「思いやりの気持ち」が最も重要であることがわかる。

幼児が身近な動植物と触れ合いやすい環境を積極的に整えて行くためには、保育者自身が身近な動植物の積極的にかかわろうとする姿を通して、子どもたちに動植物をいたわったり、大切にしたりする気持ちを伝えて必要がある（幼稚園教育要領解説，2008）。しかし、保育者や保育者を目指す学生の中には、身近な動植物の中でも特に昆虫などにかかわることに抵抗を感じる者も多い（山下・首藤：2004，栗原・野尻：2008）。

そこで、本研究では、昆虫や小動物に着目し、保育者を目指す学生の幼少期の環境や経験、昆虫や小動物（鳥、魚含む）に対する意識が、子どもに身につけてほしい力や、将来、子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかわっていくことができるかどうかといった保育実践への自信とどのような関係にあるのかについて、明らかにすることを目的し、図 I - 1 のような仮説モデルに基づいて、量的な検討を行うこととする。

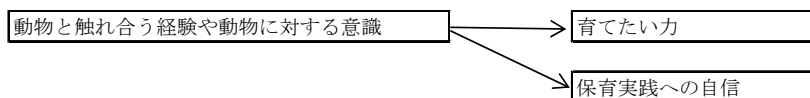


図 I - 1 動物と触れ合う経験や動物に対する意識と育てたい力および保育実践への自信についての仮説モデル

II. 方法

1. 調査対象者と調査時期

2014年7月、関西の保育者を目指すK女子短期大学1年生を対象に調査を実施した。

2. 調査方法

保育者を目指すK女子短期大学1年生92名を対象に質問紙調査を実施した（回収率97.8%）。講義時間の一部を用い担当教員により調査票を配布し、集合調査法で実施、回収した。本調査は、無記名とし、参加について学生の同意・了承を得た上で実施した。

3. 調査内容と質問項目

調査内容は、昆虫や小動物に対する過去の環境や経験についてと幼稚園教育要領に示されている子どもに身につけてほしい力及び保育実践への自信である。

（1）動物との触れ合う経験や動物に対する意識

幼少の頃、稚園や保育所及び家庭において昆虫や小動物とどのような触れ合いをしていたのか、また、過去及び現在において、昆虫や小動物に対する意識について測定する尺度として下

記の11項目を作成し、用いた。

- ①私は、幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある
- ②私は、幼い時、親と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある
- ③私は、幼い時、幼稚園や保育所の先生と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある
- ④私の家では、幼い頃から昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた
- ⑤私は、家で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした
- ⑥私の出身の幼稚園や保育所では、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた
- ⑦私は、出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした
- ⑧私は、幼い頃、昆虫が大好きであった
- ⑨私は、今も昆虫が大好きである
- ⑩私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった
- ⑪私は、今も小動物（鳥・魚含む）が大好きである

（2）育てたい力

幼稚園教育要領（2008）を参考に、動物とのかかわりの中で、子どもに身につけてほしい力として次の項目を作成し用いた。『動物の生命を大切にすゝる気持ち』として「私は、動物の命を大切にすゝる気持ちがとても強ゝいとすゝる」、『探究心』として「私には、探究心（物事について、深い知識を得たり、深く究明したりしようとする気持ち）がとてもあるとすゝる」、『公共心』として「私には、公共心（自分のことだけでなく社会一般のためをすゝる心）がとてもあるとすゝる」、『思いやりの気持ち』として「私は、人に対して、思いやりの気持ちがとてもあるほうだとすゝる」の4項目である。

（3）保育実践への自信

将来、動物にかかわる保育実践への自信があるかどうかについて、「私は、将来、保育者として子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかわっていくことができる」という項目で尋ねた。

いづれの尺度に対しても、「5. よくあてはまる」「4. 少しあてはまる」「3. どちらでもない」「2. あまりあてはまらない」「1. まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

統計処理には、統計ソフトウェア SPSS Statistics 19.0を使用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 動物と触れ合う経験や動物に対する意識についての分析

表Ⅲ-1は、動物との触れ合う経験や動物に対する意識に関する尺度の質問項目と平均値（標準偏差）である。これらの尺度11項目を対象に、主因子法・プロマックス回転による、因子分

析を行ったところ、3因子が得られた。表Ⅲ-2は因子分析の結果である。

各因子の信頼性を検証するために Cronbach の α 係数を求めたところ、第1因子は $\alpha = .847$ 、第2因子は $\alpha = .794$ 、第3因子は $\alpha = .921$ であり内的一貫性のあることが確かめられた。第1因子は、「私は、出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした」「私は、幼い頃、昆虫が大好きであった」「私は、今も昆虫が大好きである」など、昆虫に対する肯定的な関りを示す項目の負荷量が高いため、「昆虫肯定感」と命名した。

表Ⅲ-1 保育専攻学生における動物との触れ合う経験に関する項目（標準偏差）

項 目	平均値	(SD)
1 私は、幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	3.81	1.287
2 私は、幼い時、親と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	3.52	1.346
3 私は、幼い時、幼稚園や保育所の先生と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	3.23	1.284
4 私の家では、幼い頃から昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	4.22	1.020
5 私は、家で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	3.72	1.158
6 私の出身の幼稚園や保育所では、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	3.91	1.362
7 私は、出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	3.19	1.372
8 私は、幼い頃、昆虫が大好きであった	2.56	1.314
9 私は、今も昆虫が大好きである	1.97	1.125
10 私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった	3.72	1.314
11 私は、今も小動物（鳥・魚含む）が大好きである	3.55	1.389

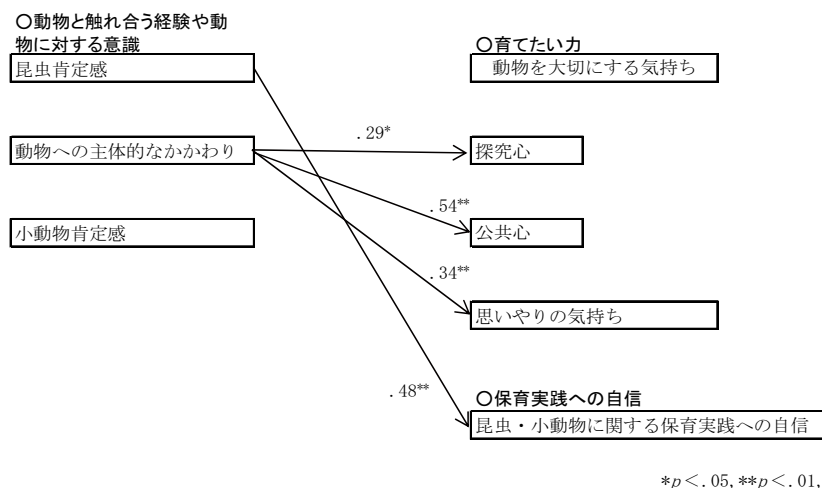
表Ⅲ-2 保育専攻学生における動物との触れ合う経験因子分析

項 目	1 昆虫肯定感	2 動物への主体的なかわり	3 小動物肯定感	共通性
7 私は、出身の幼稚園や保育所で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	.913	-.254	.038	.643
6 私の出身の幼稚園や保育所では、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	.688	-.356	.123	.361
8 私は、幼い頃、昆虫が大好きであった	.656	.122	.093	.605
3 私は、幼い時、幼稚園や保育所の先生と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	.629	.309	-.083	.674
2 私は、幼い時、親と一緒に昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	.611	.357	-.074	.715
9 私は、今も昆虫が大好きである	.459	.087	.117	.329
5 私は、家で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした	-.264	.915	.133	.684
4 私の家では、幼い頃から昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた	-.128	.739	.049	.470
1 私は、幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある	.490	.522	-.124	.747
11 私は、今も小動物（鳥・魚含む）が大好きである	.048	.056	.895	.874
10 私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった	.129	.100	.830	.866
固有値	5.190	1.450	1.280	
累積寄与率	47.178	60.355	71.992	

第2因子は、「私は、家で飼っていた、昆虫や小動物（鳥・魚含む）の世話をよくした」「私の家では、幼い頃から昆虫や小動物（鳥・魚含む）を飼っていた」「私は、幼い時、昆虫や小動物（鳥・魚含む）を捕まえたことがよくある」などであった。家庭において昆虫や小動物の世話をしたり、昆虫や小動物を捕まえたことがよくあるということは、昆虫や小動物に対し主体的なかかわりができていると考えられるため、第2因子は、「動物への主体的なかかわり」と命名した。第3因子は、「私は、今も小動物（鳥・魚含む）が大好きである」「私は、幼い頃、小動物（鳥・魚含む）が大好きであった」であり、昆虫以外の小動物に対する肯定感を示す項目の負荷量が高いため、「小動物肯定感」と命名した。

2. 動物と触れ合う経験や動物に対する意識と育てたい力および保育実践への自信との関係

仮説モデル（図Ⅰ－1）を検討するため、「育てたい力」「保育実践への自信」を従属変数として、独立変数を「動物と触れ合う経験や動物に対する意識」尺度として、パス解析を行い、1%水準で有意なパスまでを示したのが図Ⅲ－1である。



図Ⅲ－1 重回帰分析を用いた完全逐次モデルによるパス解析

育てたい力の「探究心」($\beta = .29, p < .01$)、「公共心」($\beta = .54, p < .01$)、「思いやりの気持ち」($\beta = .34, p < .01$)は、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「動物への主体的なかかわり」から正のパスが示された。また保育実践への自信である「昆虫・小動物に関する保育実践への自信」($\beta = .48, p < .01$)は、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「昆虫肯定感」から正のパスが示された。

4. 考察

本研究の結果から、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「動物への主体的なかかわり」から、育てたい力の「探究心」「公共心」「思いやりの気持ち」に影響を及ぼしていることがわかった。この結果、幼稚園や保育所及び家庭において、幼児が身近な昆虫や動物と触れ合いやすい環境を積極的に整えて行くことが大切ではあるが、最終的に、主体的に昆虫や動物

にかかわろうとするとところまで導くことの重要性が明らかになった。

また、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「昆虫肯定感」が、保育実践への自信である「昆虫・小動物に関する保育実践への自信」に影響を及ぼしていることが示された。昆虫に対し、苦手意識を克服するように努力することが、保育実践への自信につながることを示唆された。

これらのことから、学生の段階から、昆虫や動物と触れ合う経験ができる環境を養成教育の中に取り入れることが必要となる。

IV. まとめと今後の課題

本研究では、昆虫や小動物に着目し、保育者を目指す学生の幼少期の環境や経験、昆虫や小動物（鳥、魚含む）に対する意識が、動物とのかかわりの中で、子どもに身につけてほしい力や、将来、子どもと一緒に昆虫や小動物としっかりとかわっていくことができるかどうかといった保育実践への自信とどのような関係があるのかについて仮説モデル（図 I - 1）の検討を行った。その結果、育てたい力の「探究心」「公共心」「思いやりの気持ち」は、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「動物への主体的なかかわり」から影響を受けていることが明らかになった。また保育実践への自信「昆虫・小動物に関する保育実践への自信」は、動物と触れ合う経験や動物に対する意識尺度の「昆虫肯定感」から影響を受けていることが示された。

保育者養成における授業やカリキュラムの中で、どのような配慮・改善をすれば、学生の虫や小動物に対する苦手意識を克服できるかについての検討が、今後の課題である。

引用文献

- 栗原泰子・野尻裕子（2008）. 保育者養成学生の動物との関わりについて－動物への対応と幼児への援助について－川村学園女子大学研究紀要第19巻第2号. pp.27 - 38.
- 厚生労働省（2008）. 保育所保育指針.
- 山下久美・首藤敏元（2004）. 幼児への動物教材（ムシ類）の提供についての研究. 埼玉大学教育学部教育実践センター紀要, 3, 149-157.
- 文部科学省（2008）. 幼稚園教育要領.
- 文部科学省（2008）. 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

参考文献

- 川村高弘（2010）. 保育専攻短期大学生のレジリエンスと保育者効力感の関係. 愛媛女子短期大学紀要, 22, 17-24.
- 川村高弘・岡部康成（2011）. 保育専攻短期大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 浜松学院大学研究論集, 8, 141-150.
- 川村高弘（2012）. 幼稚園教諭における自己教育力とレジリエンスおよび保育者効力感との関連. 修士論文（愛媛大学大学院）.

- 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響. 教育心理学研究, 50, 283-290.
- 西村正子 (2000). 看護職者の生涯学習 年代別比較と自己教育力からの検討. 岐阜大学医療技術短期大学部紀要, 7 (1), 45-55.
- 西山修 (2006). 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成. 保育学研究, 44 (2), 150-160.
- 宮里智恵・川村高弘 (2013). 大学生の自己教育力と食育効力感の関連くらしき作陽大学研究紀要, 45 (2), 43-52.
- 森敏昭・清水益治・石田潤 (2000). 大学生の自己教育力に関する発達の研究. 広島大学教育学部紀要, 第1部, 49, 7-14.
- 森敏昭・石田潤・清水益治・富永美穂子 (2001). 大学生の自己教育力に影響する要因はなにか. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第1部, 50, 1-8. 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・C.Hiew, C.C. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 広島大学教育学部附属教育実践センター (編). 広島大学教育学部学校教育実践学研究, 8, 179-187.
- 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・C. Hiew, C. C. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 広島大学教育学部附属教育実践センター (編). 広島大学教育学部学校教育実践学研究, 8, 179-187.
- 文部科学省 (2002). 「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」報告書.
- 山下久美・首藤敏元 (2009). 幼稚園・保育園での虫飼育実践の提案. 埼玉大学教育学部教育実践センター紀要, 8, 159-168.

付記

1. 本研究は, 全国保育士養成協議会第53回研究大会でポスター発表したデータを再分析し, 論文としてまとめたものである。
2. 本研究を行うにあたり, ご協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。